

b) 硝子様物質はアニリン青に対して親和性が強いように思われる。

IV] 動物実験による類硝子様物質の形成

血液を成熟白鼠の血管内に注入し、約12時間後及び36時間後に斃死した2匹の白鼠の肺臓に、新生児肺硝子様膜と頗る類似する膜様物を形成せしめ得た。

以上の研究を総括考察し、新生児肺硝子様物質の本態及び成因について、従来行われている羊水説を特に否定するものではないが、新生児殊に未熟児に起り易い肺泡毛細管の鬱血、破綻による出血の存在が硝子様物質形成の有力な一因として考慮される。

第12群 子宮癌に関する問題

114. 流血中の悪性腫瘍細胞の検索に関する2, 3の知見

(福島医大) 貴家寛而, 大川知之, 遠藤二郎
深田三夫, 大沢正司

悪性腫瘍に於いて腫瘍細胞を血行中に証明しようとする試みは1934年 Pool & Dumlop によつて、初めて試まれ更に1935年 Sandberg が新しく腫瘍細胞を集める方法を考案するに及んで初めて廣く臨床的にも取り上げられる様になった。本邦でのこの種の研究はこゝ2, 3年来、当大学病理学の佐藤、宗像らが実験腫瘍について行つて居り、臨床的にはその変法による2, 3の報告があるに過ぎない。

我々は絨毛上皮腫及び子宮癌患者について流血中の腫瘍細胞の検索を行つたのでその概略を報告する。

実験方法：採血部位は生体に於いては末梢血液として肘静脈、手術時の Drainage vein 心臓カテーテルによる右心血、剖検例では右心血を直接採血した。尚、腫瘍細胞の対比の目的に摘出腫瘍の Stamp を並行に行つた。染色方法は Sandberg 氏原法による宗像氏変法を用い染色は Wright-Giemsa 氏法によつた。流血中に於ける腫瘍細胞の発現率は従来の本邦での2, 3の報告では極めて高率で60~70%に腫瘍細胞を検出し得たとしているが、我々の検索結果はそれほどの高率には発見出来なかつた。我々の検索方法及び腫瘍細胞の決定は検索例について夫々の原発巣の Stamp 標本を作り血中腫瘍細胞と対比せしめて、その大きさ、胞体及び核の染色性、核小体の状態、核分裂の状態等を個々に検討を加えたもののみを腫瘍細胞と見做した。この結果①絨毛上皮腫患者の剖検例の右心血及び手術時子宮 Drainage Vein の血中には全症例に腫瘍細胞と思われる直径20~40 μ の胞性の塩基好性の極めて強い核小体の明瞭に認められる

細胞を証明した。且つ手術時 Drainage Vein より証明した例では何れも病側静脈血中にのみ認め健側静脈には認めなかつた。②絨毛上皮腫患者の術後、肺轉移を明らかに認め且つその他に轉移を疑わせる様な症状を呈した患者について心臓カテーテルを施行し右心血を採取したが①の如き細胞は認めなかつた。③絨毛上皮腫患者の術前及び手術不能例では死亡した患者の生前時に末梢血より1例に付き十数回にわたり検索を行い且つ大腿動脈よりもしばしば採血して検索したが同一患者の手術時及び剖検時右心血中に検出し得た様な細胞は認められなかつた。子宮癌患者についても同様な検索を行つたが、絨毛上皮腫に比し結果は極めて低率であつた。現在なお他の症例について検索を実施中である。本検索によれば手術的侵襲により腫瘍細胞が血行中に侵入する可能性があること、腫瘍細胞は右心ひいては肺迄には比較的容易に血行性に移行するが肺以降即ち末梢には容易に出にくいこと、本細胞の末梢出現の有無で患者の予後を判定することとはかなり困難な点があると云える。

115. シリコン法による流血中癌細胞の分離検出について

(東京警察) 竹内正七, 松枝和夫, 吉田武彦
羽生藤伍

末期癌患者の骨髓や流血中に癌細胞の発見されることは、1937年 Rohr の報告以来散発的に発表されていたにすぎなかつたが、1955年 Engell が詳細な総合的研究を発表して以来、頗る欧米で研究が活発となり、末梢流血中に癌細胞が遊離の状態が認められることや手術操作により所屬静脈血中に発見される頻度の高くなることなどが、相次いで報告されて来ている。本邦においては近時ようやく宇野や田崎により高い陽性率が報告され、癌の血行轉移の問題に関連する重要問題として注目されて